

海 (かいし) 市 No. 8

● 詩

02 前田 勉 トウオネラの川

06 横山 仁 生活の柄 5

● エッセイ

08 片津 森 鞍掛山から

13 佐藤ただし 水田とツバメ (6)

16 横山 仁 雑記 (8)

トウオネラの川

前田 勉

憂うつな一月
と

原稿用紙に書いた日から
時どき

後頭部のあたりで

チエロの音ねが

ゆつくりと

陰鬱に鳴りだすようになった

その人は

昼すぎの陽光を避けるように

木立の下のベンチに座り

本を読んでいた

どこかで見た絵に似て

本と足元で

葉陰が小刻みに揺れている

遠くの草むらから雲雀が飛びたつて

甲高く鳴き始めると

追うように顔をあげ

本を差し出して何かを言っている

笑いながら

私の方を指さしているが

雲雀の鳴き声が増幅されて

声がとどかない

とどいてこない

何回目かの

重厚なチェロの音が響きはじめた三月
それが

シベリウスの曲であったことに気付いた

イングリッシユホルンが

白鳥の鳴き声になって奏でられると

霧に覆われた冥府トウオネラの

暗く冷たい川が波打って両岸を浸し

かすかな波音をたててゆく

ほかに聞こえるものはない

耳の奥で鳴っていた高周波音が止み

川波が届いた先で

父母や兄たちが

黙している

その人も

黙している

卒そつこく忌ぎが近い

生活の柄 5

横山 仁

(耳の中がかゆくなるのは
年とった証拠だ)

ぶつくさく

杖をつきながら

学徒動員の老母は

神奈川の軍需工場行きの列車に乗りこんだ

(ロシヤでねが

言ったのは 八丁はちぢょうのカネだ

高層建築の

きらびやかな都会は どこでもロシヤなのだ

戦意高揚の歌もながれていた

ゆがんだ時のなかで

心地よい眠り

なんてあつたのか

撃ち落とされた夢

の残骸

沈められた夜明け

の破片

老母の

遠くなった耳の奥では

空虚が飛んだままだ

鞍掛山から

片津 森

国道四六号線の仙岩トンネルを東へ抜け、車が雫石の平野部に差ししかかって視界を遮るものがなくなつた辺りで、左前方に岩手山がどおんとそびえていた。その稜線が右に下つた先にあるポコンとした山が鞍掛山だ。何度か登つたその山頂からは岩手山がすぐ間近に見えていた。だから、その近さを感じとしてもつていた。それが、遠い車中からあらためて眺めてみると、あのふたつの山の間になんかの隔たりがあるのが意外だった。

ある登山ガイドブックに、鞍掛山は岩手山の寄生火山だと記されていた。寄生火山は、大きな火山の側面に付随して生じた小火山体のことで、測火山ともいうらしい。富士山の山頂から南東方面にコブのように

なっている宝永山も寄生火山だという。宝永山は富士山の五、六合目付近にあつて、いわば富士山と一体となつている感じだが、鞍掛山の方は独立していて、コブというより岩手山の子分のような感じがする。

観光施設の小岩井農場を過ぎて北へ向かう勾配が徐々に増してくるにしたがつて、アクセルを徐々に深く踏んでいた。左にカーブしたあたりで右に登山口駐車場が見えてきた。五月の連休後、この駐車場の周囲には桜が咲いていて一帯を明るくしていた。車も多く留まつていた。駐車場発十時四十分。滝沢市の「たきざわ自然情報センター」の横を通つて山に入った。

路は整備されて登りやすい。一帯には登山道のほか散策路もある。路傍に立つ木々にはその名を記したプレートがつけられていて親切。よく管理されている印象だ。盛岡市内から近いせいかな登山者は多く年間三万人が訪れるらしい。ゆつくりした登りで、木々の間から日が差し込んで明るい。

前に行く人と同じペースでつかず離れず、足元にエンレイソウを見、芽吹いたばかりの木々の上に眺めながら登る。途中、四等三角点があつた。花崗岩でな

くコンクリート製の柱が埋設されていた。見晴らしのいいところに来ると、ベンチで休憩をとる二人連れ。その背中側から遠望すると早池峰山や姫神山が見えた。ここから路は左へ曲がる。

しばらく行くと、右へ下る地点がある。昨年来た時に通った坂は通行止めになっている。ほんのすぐ先でも同じ場所に下る階段があるので、一方のみを生かすためかもしれない。右に折れるその路はしっかりと階段になって、下るとすぐに橋を渡る。そこでちょっと水場に降りて手を入れてみたが思ったほど冷たくはなかった。それにしても、チロチロと音や光を放って流れてくる沢水を見ると、喉が渴いていなくても、何の用がなくても嬉しくありがたいと思う。生命体にとって不可欠の水を見ると、体のどこかが安堵で浸される感じがする。

路に戻るとそこはT字路になっていて左へ進む。すぐに路の右側にカタクリの小さな紫の花が群れていた。少し遅咲きではないかと思っただが、駐車場の桜が今頃咲いているのだから遅いと言えは遅い。ようするに鞍掛にようやく春が訪れたのだ。傾斜がきつくなつてく

ると、また展望地があつて、姫神山がよく見える。そこを通過し階段を上るとすぐに頂上に着いた。

標高八九七メートル、登山口からの所要時間一時間四十分。眼前に岩手山が屏風のように立ちはだかつている。噴火したときの溶岩の流れが山巒をつくっている。向こうの馬返しコースはどこだろうなどと探した目の先に、コースの一部らしい地肌の出ているところがあるが、それが登山コースなのか確信はない。山体の左の方にあるはずの御神坂おのみさかコースとなると、見えるような角度ではない。展望台のようなこの山頂には登山者が入れ代わり立ち代わりやつてきて、休憩し、昼食を食べて、たいがい長居はしないで下山して行く。

いっとき空腹を満たした後こちらも下山することにした。中学生の団体が登ってきて、その列がなかなか途切れない。一人に人数を聞くと百五十人と云ったか。まあ、急いでいるわけでもないから、と彼らが通過するのを待つてから再び下り始めた。さっきの水場の上のT字路では右下の橋を渡らず直進する。緩やかな明るい路をぶらぶら下ると林越しに牧野が見え、林

道に出た。そこに、これまで見たことのなかった看板があった。牧野に沿って歩いてみないと書かれていた。今日まで何度かここを通過したが、実は見過ごしてきたのかもしれない。今までは広めの林道を通って登山口まで歩いていたが、今日は、お誘いにこたえて歩かせていただきましょう、と牧場の縁と林道の間に延びる小道を歩いた。鉄条網が仕切った牧草地の平坦な緑の広がりが目心地よい。しばらく行くと、右にキャンプ場が見えたあたりで路は自然に消えているので、すぐ傍の林道を歩いていくと、登山口駐車場はすぐそこだ。

この駐車場の片隅に宮沢賢治の石碑が立っている。面には次のような詩が刻まれていた。

くらかけの雪

たよりになるのは

くらかけつづきの雪ばかり

野はらははやしも

ぼしゃぼしゃしたり黝くすすんだりして

すこしもあてにならないので

ほんたうにそんな酵母おほのふうの

朧おぼろなふぶきですけれども

ほのかなのぞみを送るのは

くらかけ山の雪ばかり

(ひとつの古風な信仰です)

詩集春と修羅より

帰宅後に開いた賢治の本の中にその詩を見つけた。

(注1)

黝くすんだ野や林の辺りを賢治が歩いている様子が思い浮かぶ。この「ぼしゃぼしゃした」という表現は、「永訣の朝」にある「びよびちよふつてくる」みぞれや「びちよびちよ沈んでくる」みぞれと似ている。そのみぞれが顔とか手にふりかかる感覚が感じられる。鞍掛山の麓の小岩井あたりで、湿った吹雪の中を、うつむき加減に歩いている姿、頼りになるものは、ほのかにのぞみを送つてよこす鞍掛山の雪だけだと、時折山を見上げている姿を思った。

*

賢治のこの本を開いたのは久しぶりだった。昔、「永訣の朝」を読んだ時など、死の床にいた妹トシを思いう心にうたれてしんとしたことがあった。それでも賢治の詩のもつ難解さにつまづき、それつきり遠ざかっていった。「小岩井農場」という詩には、「くらかけ山」の名を何か所か見つけることができたし、「くらかけ山の雪」という題の詩がもう一つ別にあることも分かった。この詩の方は「雨ニモマケズ」が記されていたのと同じ手帳の中に書かれていて、石碑の詩は二十二歳、手帳の方は三十五歳ころのものだという(注2)。鞍掛山は賢治にとっても身近な山だったようだ。

「小岩井農場」はほとんど初めて読んだ。賢治は盛岡軽便鉄道小岩井駅から歩いて農場を巡った時の、その先々で目に入ったものや耳に聞こえたものなどの描写やその印象、自分の中に生じたイメージが展開されていた。そこには音楽性があるように見え、繰り出す言葉に精神や感覚の自在さを強く感じた。いま開いている本の所どころに難解さを感じるのは今も同じだけれども、全体的にどこか独特の明るさも含まれていて、そのあたりに惹かれるものがあった。

四年前、鞍掛山を下山し帰路につく前に、盛岡市の西方にある太田薬師という四百メートルそこそこの山に登ったことがあった。その登山口付近に賢治の歌碑を見た時は、賢治の行動範囲の広さ、こんなところにまでという足跡の範囲の広さに驚いた。花巻や盛岡、岩手山、小岩井だけではなかったのだという発見だった。でも、それは、オメ、オメなあ、今頃そつたごど分がったつてが、と地元の人や賢治を知る人から言われそうなことかもしれない。

ある人が賢治の石碑について調査している。それはネット上でだれでも見ることができる(注3)。それによると、賢治の詩や歌などを刻んだ石碑は、花巻市内に四十七基、その他県内に五十八基、県外に三十九基もあるという。それほど賢治は多くの人に広く親しまれ、敬愛もされていたのだろう。教員時代や羅須地人協会時代に、賢治から直接学んだ人たちは多かったと思うし、その人たちが賢治から享けたものは、その土地のひとたちの土壌になり、風土を醸しているのだろうなどと思った。

(注1) 私が持っている本は新潮社の「日本詩人全集20 宮沢賢治」で、詩と童話から選んで一冊に集めたもの。この詩の場合、題は「くらかけ山の雪」となっているほか、いくつか碑と違う部分があった。正誤のほどは分からない。

(注2) 小学館「群像日本の作家12 宮沢賢治」中、中村稔「『雨ニモマケズ』について」による。

(注3) 「石碑の部屋 宮沢賢治の詩の世界」で検索すると見ることができる。

水田とツバメ（六）

佐藤 ただし

・Kさん

家の近所に住んでいたKさんが亡くなってひと月になる。享年八一歳。亡くなるひと月位前に救急車で病院に運ばれたということは人づてに聞いていたが、そのまま帰らぬ人になるとは、俄かには信じがたかった。田植えの終わった水田を眺めていても、まだその辺にいるような気がする。

Kさんの家は確か田んぼが一九枚（一・九ha）あって、この辺では耕作面積が多い農家だった。戦前は近所の若者を若勢として家に置くような家だったと聞いている。

Kさんは長く市内の電気工事に勤めながら、田んぼや畑を作り、家を支えてきた。

私はKさんとは二〇歳くらい年齢が離れていたが、コメの生産組合の仕事で秋に収穫した米を農協に集出荷する仕事を一緒にやらせてもらったこともあった。昭和五〇年代後半には組合長として地域の中心的な存在として活躍していた頃の記憶が残っているためか、体調を崩して長く入院し、田んぼの耕作を同じ町内の人に頼み、一線を退いて一〇年以上経過しても、まだ農業が出来そうで、地域の力になれるような錯覚を覚えてしまう。

Kさんのように何らかの理由で、田畑の耕作を離れる人は、一人二人と少しずつ出てきているが、その代わりをする人が少なく、機械の大型化や作業方法の改善で対応しているのが現状だ。

Kさんが出荷組合の組合長をしていた頃、北海道の道南に二泊三日の旅行に行ったことがあった。総勢一二名で、夫婦連れだった。

当時は、青函連絡船がまだ運行していた頃で、夜に秋田を立ち、夜中に青森から連絡船に乗り、朝方に函館に到着するという工程だった。

早朝に函館駅で電車に乗り換える時、一緒に行った

二人がトイレに寄っている間に電車が出発してしまい、次の電車でやって来るのを洞爺湖の駅で待つというハプニングがあった。

函館で離ればなれになって、洞爺湖駅でまた一緒になるまで、時間にすれば三時間くらいだったと思うが、駅の改札口から照れながら入って来た二人を出迎えた時は、しばらくぶりで会えたような嬉しい気持ちになったのを覚えている。

この一件で旅行のグループが一つにまとまったと思つたのも束の間、その後も昭和新山を見た帰り、乗り換えのバス停にひとりだけ降りずに乗り過ぐすといった事が続出し、思い出深い旅行となった。

組合長だったKさんは、そんな我々をまとめるのにずいぶん苦労しただろうが、お蔭で我々は十分楽しい旅行をすることが出来た。

帰りの車窓からイネ刈りを控えた田んぼを見て、これから始まる秋の収穫作業を思い、気持ち引きしまる思いをしたのを覚えている。

無事に秋田に戻っても、そのまま家には帰らず、馴染みのすし屋に寄り、ハバキ抜きと称して、そこでま

た一杯飲んだ。

Kさんは乾杯の挨拶をした後、旅行を無事終えて安堵したのか、それとも酔っていたのか、大きな船に入った寿司を箸で摘まもうとして、間違えてワサビの塊を摘まんで口に入れ、涙を流して笑っていたが、この涙はワサビの涙か、組合長として最後の旅行を無事に終えた安堵のためか、そばにいた私には判断がつかなかった。

この事態に場は大いに盛り上がり、最後までハプニング続きの旅として、今も語り継がれることになった。

五月初めに告別式があり、会場には親族や知人など百名くらいの参列者がいた。祭壇には笑顔の写真が飾られ、多くの生花に囲まれていた。

葬儀の後半に、生前のKさんを血は繋がっていないが、父と思つて慕っていたという男性が弔辞を読み、Kさんの人柄や受けた恩情について話をした。続いてKさんにとっては孫にあたる高校生くらいの若者三人が、それぞれに飾らない言葉でKさんから受けたやさしさや笑顔や思いやりを語った。

この人達の話を会場の後ろの席に座って聞いていると、葬儀は亡くなった人を弔う場であるとともに、亡くなった人が残したものが評価される場でもあると思った。生前にその人がやろうとし、残そうとしたものと、周りの人がその人から受け取ったものは違うのかなど。

Kさんが生まれた昭和一〇年代初めは、農作業は手作業にたよるものが主で、田植え一つとってもすべて手植えの時代だ。動力を使った農機具も出始めの頃でなかったかと思う。私が子供の頃でさえ、炊飯器も洗濯機もまだ、農村には普及していなかった時代で、米を炊くのも、籾殻を燃料としたもので、ヌカ釜と呼んでいたと思う。洗濯も洗濯板を近所の小川で使っていたのを記憶している。

現代は高度に自動化され、省力化されたものに囲まれて生活しているが、こうした手作業の労苦を経て今があるということを忘れがちだ。Kさんのように戦前に生まれた人たちは、俗にいう、物がなかった時代に生まれ、激動の戦後を経験してきた世代だ。

Kさんの笑顔の遺影にはそうした手作業の労苦や田

畑を維持してゆく責務といった重荷が消え、ある時代を生き抜いた、晴ればれとしたあかるさがあった。そんな印象を持った葬儀であった。

Kさんが亡くなり、今、その家には奥さんがひとり暮らしている。Kさん夫婦には息子と娘が一人ずついるが、この後どのように暮らしてゆくのか気にかかるところだ。冬の除雪や病院への通院などを考えると、田舎でひとり暮らすのは高齢者でなくてもきついだろうなど思う。いずれは自分のこととして対処しなければならぬ問題だ。

Kさんにはあの世で、ゆっくり休んでほしいと思う。そして、いつもの笑顔で私たちを見守っていてほしいと思う。

雑記 (8)

横山 仁

前号 (7号) の末尾に (引用終わり) を追加されたい。

*

知人からもらった32ページ足らずの豆本に、興味深い文章があった。(もちろん、これだけではない。)

「いかなる詩や詩集も、思考外のものだという論は、いつだって成り立つまい。それは多分、自身の辞書を持たない者の論だ。想像できないほど詩の範疇が広がっているからといって、対象の一冊の詩集を前にして思考しないのは詩以前の問題。把握することに錯誤が考えられるなら、難解という言葉を吐くの

も錯誤。読まず、自身の辞書さえひかず、詩は難解などと説明するのは怠慢。

詩集には当然、その者の言葉がなければならぬい。」

「私はやはり、私自身をふりかえらせてくれる詩集に興味を見つける。形なり、方法なり、意味なりを考えさせるものでなければならぬのだ。最近のものでは、柴田正夫の「馬とうま」「北鹿林」、細部俊作^{*}の「凍河の下で」、坂本梅子^{*}の「風葬の村」その他。中央には、捉え難い岩成達也^{*}の詩集。これらには枠からはみ出る勢いの、一方向での言葉の流れを感じてしまう。いつだって、読み手の把握から余っちゃう言葉を持っているということだ。」(注の印は花びらを使っているが、*で代用させた。また注記は省略した。砂室圭『言葉・もしくは詩集と云われる辞書』1983年、より)

こうした、あたりまえの言葉さえ、消費される以前に、消えてしまう。「私自身をふりかえらせてくれ」

ない言葉、そんな泡あはは、いらぬ。

*

アメリカ大統領がトランプになったことで、すこしは戦争屋から解放されると期待されたが、けっきょくは「成金上がり」で、ブッシュと同じように、偽情報をながし、シリアを爆撃した。(引用は、「飯山一郎のLittle HP」grnba.jpによる。)

(引用開始)

◆2017/04/11 (火) 戦争屋の言いなりになったトランプ政権の写真(注、写真は省略)

1週間前にテイラーソンは、アサド政権崩壊は重要目的でないと述べたばかり。
政策を急変させたクシュナーとテイラーソンの対立は深刻だ。

さらに重要なことは、上の写真にはマイク・ポンペオ CIA 長官やダン・コーツ国家情報長官の姿が見えな

いことだ。

4月4日にガスを撒き、5日には犯人はシリア政府と断定し、6日にはシリアへミサイル攻撃をした米政府。6日にポンペオ CIA 長官は、アサド大統領には毒ガス散布の責任がなさうだとトランプ大統領に説明していた。

つまりトランプ大統領は、CIAからアサド大統領には毒ガス散布の責任はないと説明を受けたうえで攻撃したのだ。

そのCIA長官が外された場で、トランプ政権の面々がNSC(国家安全保障会議、ボスはマクマスター、前任はフリント)から、ミサイル攻撃の説明を受けている写真は…

現在、トランプ政権の軍事政策を仕切っているのは、NSCのマクマスターだ！ということが見事に分かる写真だ。

(引用終わり)

「アジア人同士戦わず」とは、副島隆彦氏の思想だが、アメリカ(「自作自演戦争屋」◎きのご組長)がシリ

アと同じように、北朝鮮を攻撃し、逆にギタギタにやられる姿をみてみたいという意見もネットで広がっている。

わたしらは、マスコミで報道されるいいの(報道しない、というべきか)、北朝鮮やアメリカの姿をどれだけ知っているだろうか。「だから、読書！」と、「一月万冊」の清水有高氏なら、いうだろうな。

(引用開始)

◆2017/04/25 (火) 2 北朝鮮は「怨念の国」だということ

怨念の原因を↓知れば…

アメリカが北朝鮮でやったこと

60 数年前. 朝鮮戦争中, アメリカは, 第二次世界大戦中に太平洋戦域全体で投下したより多くの爆弾を北朝鮮に投下した.

32,000 トンのナバーム弾を含むこの絨毯爆撃は, 軍事

標的だけでなく, 意図的に一般市民を標的にし, 戦争をするのに必要な程度を遥かに超えて, 北朝鮮を壊滅させた.

都市丸ごと破壊され, 何千人もの無辜の一般市民が殺害され, 遥かに多くの人々が家を失い, 飢餓になった.

「三年ほどの間に, 我々は住民の20パーセントを絶滅した」と, 朝鮮戦争中に戦略空軍最高司令官だったカーネイス・ルメイ空軍大將は, 1984年, Office of Air Force History に語った.

元国務長官デイン・ラスクは, 「アメリカは, 北朝鮮国内で動くあらゆるもの, あらゆる煉瓦を爆撃した」と述べた.

朝鮮戦争の後半, 都会の標的が不足するようになると, アメリカの爆撃機は水力発電用や灌漑用ダムを破壊し, 農地を氾濫させ, 作物を破壊した…

『我々が北朝鮮に一体何をしたのか忘れているアメリカ人』(Vox World)によると…↓↓↓

1月3日午前10:30、82機の空飛ぶ要塞B-17の大編隊が、致死的な貨物を平壤に投下した。…何百トンもの爆弾と焼夷弾が、平壤中で同時に投下され、壊滅的火事を起こした。

アメリカ軍は、2日後、爆発する遅延作動型爆轟爆弾で平壤を爆撃し、おかげで人々は街頭に出るのが不可能になった。

二日間、都市全体が燃え、火に包まれた。

二日目には、7,812人の一般市民の家が焼かれた。アメリカ人は、平壤にはいかなる軍事標的も残っていないことを十分承知していた。

爆弾の破片、炎や、煙による窒息で無くなった多数の平壤住民の数は計り知れない…

戦争前は人口500,000人だった都市に残ったのは、約50,000の住民だった。

戦争が終わって以来、65年間、アメリカは、この共産主義国を罰し、屈辱を与え、苦痛を味あわせるため、出来る限りのあらゆることをやってきた。

ワシントンは、朝鮮民主主義人民共和国を飢餓にさらし、北朝鮮政府が外国資本や市場にアクセスするのを阻止し、経済を壊滅的経済制裁で締め付け、強力なミサイル・システムや軍事基地をすべそばに配備した。
原典：『ヤスコミに載らない海外記事』

そうして今もアメリカは、『作戦計画5015＝金正恩の首狩り作戦』という実戦さながらの激烈な軍事演習を行っている。

ペンス米副大統領は「北朝鮮への米国の我慢も終わりに達した」と言ったが…(記事)

北朝鮮の我慢は、どうの昔に終わっている！

金正恩(33)は、北朝鮮の我慢と怨念の象徴なのだ。

金正恩、この青年の存在自体が…

国家と民族のために、生命を懸け…

生命を捧げるに足る『民族の象徴』なのだ。

そして、さらに、『戦争の大義』なのだ。
どうか思い知って欲しい。>皆の衆
飯山 一郎 (71)
(引用終わり)

日本は、やはりホの問題が第一だな。「従米から親露・
共露へ 国策大転換！」(飯山一郎氏)で、安倍宗任
の末裔は、フケイチ鎮圧ができるのだろうか。あてに
するほかない。

あとがき

◆ビクリグミの実がならないので調べたところ、自家結実性が低いとのことで、数年前ジベレリン処理をし、実をつけたことがあった。そのグミを、隣家との境から坪庭(つば)の中ごろに、適当に移した。はたしてことしは、実がなるやら。(J)

◆芥川賞作家、藤原智美の『文は一行目から書かなくていい』を読み始めた。「書けない」が「書くこと」の第一歩と、前書きからして既存の文章読本的なものとは違うような予感。まあ、読んだところで文章がうまくなるわけでもないが……(B)

◆友人の畑の一部を借りて野菜を作り始めた。畝に腰を屈めっぱなしの後、立ち上がる度に腰をすっきり伸ばせない。歩く脚はガニ股で、格好だけいっぱしの腰痛もちの田舎おやじになっていた。ふと視界の端をよぎったものはトンビで、自分より体の小さなカラスに追われて逃げ回っているのが滑稽だった。(K)

◆今年はずバメの飛来数が少ないように思う。4月7日に初飛来を見てから田畑や家の周りで見かけることはよくあるが、数は去年と比べるとかなり少ないような気がする。これはこの地域だけのことなのか、日本全体のことなのか気になるところだ。我が家の作業小屋は初見以来ずっと戸を開けてきたが、飛来したずバメの数が少なく巣が足りているのか、それとも小屋の中が乱雑なのを嫌ってか、何度か小屋の中に入ったところは見かけたが、今のところ巣は作られていない。

来年はずバメの民宿として気に入られるように、小屋の整理整頓を心掛けたい。(T)

「海市」第8号

2017年6月18日発行

発行 書肆えん

秋田市新屋松美町5-6 横山方